

護持山朝光院天性寺所蔵『天性寺聖地藏尊縁起』および

「天性寺地藏菩薩縁起」五種紹介

辻 陽 史

はじめに

田城―石山合戦から大坂の陣まで―（岸和田市立郷土資料館、平成十六年）

岸和田市南町にある天性寺には、「天性寺聖地藏尊縁起」と称される縁起絵巻一巻が伝存している。この縁起絵巻は四回にわたって特別展にその写真が出品展示され、簡単な紹介が以下の

「岸和田城常設展示図録 岸和田城と岡部家」（岸和田市教育委員会、平成二十三年）

図録ならびに『岸和田市史』になされている。

しかし、これらは、本稿に挙げた【絵④-1】【絵④-2】の紹介にとどまり、絵巻の書誌情報なども掲載されていない。

・「春季特別展 岸和田の文化財」（岸和田市立郷土資料館、平成五年）

この度、天性寺住職・土井信演氏のご厚意により、本縁起絵巻を調査する機会を得た。本稿は、「天性寺聖地藏尊縁起」の全文翻刻および天性寺の縁起を伝える資料五種を紹介するものである。本稿で紹介する資料は次のとおりである。

・「春季特別展 泉州の寺社縁起」（岸和田市立郷土資料館、平成八年）

・「岸和田市史」第三巻近世編（岸和田市史編さん委員会、平成

① 「天性寺聖地藏尊縁起」

十二年）

② 「地藏菩薩利益集」所収「岸の和田天性寺地藏尊靈験の事」

・「岸和田城天守閣再建五十周年記念特別展 戦乱の中の岸和

③ 「泉州志」所収「天性寺地藏在岸和田」

④ 「和泉名所図会」所収「蛸地蔵」

⑤ 「泉州史料」所収「縁起」

⑥ 「蛸地蔵尊略縁起」(岸和田市立図書館所蔵)

⑤および⑥は、すでに出版されたものであるが、入手が困難な資料であるため、⑤については該当箇所引用、⑥については岸和田市立図書館及び天性寺に許可を得、全文掲載をした。

一 護持山朝光院天性寺について

護持山朝光院天性寺は、浄土宗・知恩院の末寺である。本尊は、阿弥陀如来と「蛸地蔵」と通称される秘仏の地蔵菩薩である。「蛸地蔵」の名称は、海中より蛸に乗った地蔵菩薩が出現し、岸和田の町を守ったとする縁起に由来する。なお、土井住職によれば、天保年間の火災により記録を失い、天性寺史の詳細は不明であるが、「増上寺史料集」第五巻所収「浄土宗寺院史料由緒書」「泉州寺院開山帳 岸和田組」には

一、泉州南郡岸和田城下 天性寺

知恩院末寺也、此寺元有俗家裏、開山誰人不知、然得
譽寛永貳年乙丑(同前江)従大守東西三拾間南北十六間餘乞請
寺地、天性寺建立之、依之以得替爲開山、除地黒印有

之、

一、開山得替因名護白、生國和州小寺村也、姓氏難知、
一、剃髮所京都三條天正寺也、師範不知、檀林附法師亦不
分明、天性寺在住五拾年、

一、得替遷化寛文拾三年癸丑九月八日、行年八拾四、

元禄九年丙子六月十一日 泉州南郡岸和田 天性寺
當住 單譽 印

とあり、寛永二(一六二五)年に現在の地に、得替上人が天性寺を建立したと伝えている。

二 「天性寺聖地蔵尊縁起」と「天性寺地蔵菩薩縁起」五種

【凡例】

・漢字は、新字を使用し、略字などは通用の字体に改めた。仮名遣いについては、原文のままとした。なお、①「天性寺聖地蔵尊縁起」の文には適宜読点を施した。

・虫食い等により判読できない場合、その字数がわかるものは、字数に相当する□であらわし、字数が不明の場合は、
であらわした。改行は/で示した。文字が推定できるものは

(カ)と注記した。

・絵が挿入されている箇所には【絵①】のように示し、別途、絵を掲載した。

①【天性寺聖地蔵尊縁起】

【書誌事項】

天性寺蔵。卷子本、一卷。後補表紙、錦龍紋（金、茶、緑）。題箋「（題名なし）」。料紙・間合紙。縦三四・八センチ、横一〇七九・二センチ。全十三紙（一〇四四・七センチ）。

絵（彩色）十四図。第十二紙に本文同筆にて「天性寺聖地蔵尊縁起浄書了／弘慶叟印記」とある。第十三紙継書に「地蔵尊縁起今茲因裝潢修飾記蓋為開扉也 護持山十八世安政四年三月上浣 慈普仁達」とある。絵の画風からは江戸時代後期の作成と

料紙	値（センチ）
表紙裏	34.5
1	92.8
2	95.3
3	68.3
4	95.1
5	75.8
6	95.6
7	95.4
8	95.4
9	94.6
10	78.3
11	72.7
12	58.6
13	26.8
全長	1079.2

推量できる。

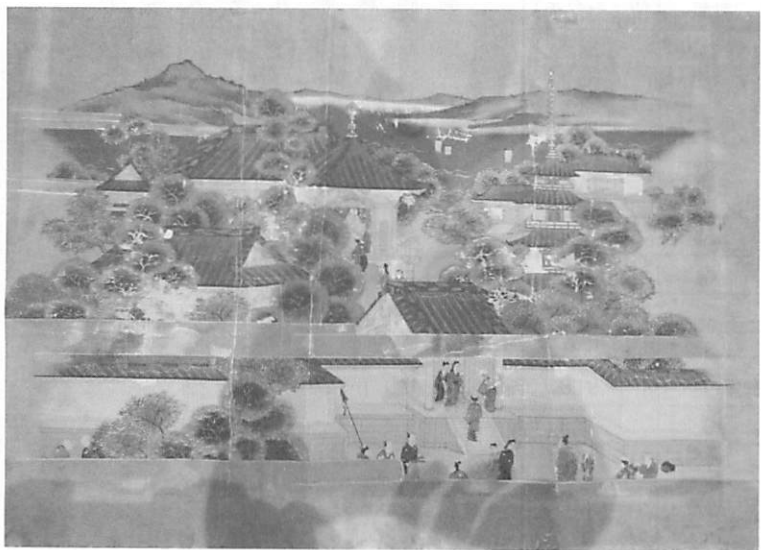
【本文】

諒に夫当山に安置し奉る地蔵菩薩は、誰人の作／といふ事をしらす、其由来を尋奉るに、往古より／此郷に久しくあらせらる、尊像なるを以て、人伝へて／岸和田の地主神なりと□^{云々}ならはせり、抑其始を尋るに／昔こ、に地蔵菩薩□^座の霊場ありて宝塔仏閣煥／乎壯麗美工を尽□に当時ならふる寺院なし／と今の御城内即ち其遺跡なり、／

【絵①】

或時、朝敵此伽藍に乱入して陣屋を構へ、恣に／僧徒を捕て軍事に使役し、金銅の仏具等を摧き／兵器となし、剩へ地蔵尊を壊んと斧を操て打侵／せしか、尊像は本木躰ながら金剛牢固鍔石の如く／にして、少も損し玉はず、於是軍賊怪み怖れ、尊像を／海中に投棄ければ則海底に沈み玉へり、爾しより／幾く春秋を経つ、誰有て知る者なかりき、爰に人皇／九十五代後醍醐天皇の御宇、建武の年楠判官正成此国を領す時に、甥の和田和泉守在城の砌、或時風／頻りに起り、浪溢れ、方に城内に入んとす、城中／城外の諸人甚だ驚き、所々へと逃去、其時法師の／形なるもの漂々として／

【絵②】



【絵①】



【絵②】

波に浮ひ城の際に入来れば風波忽ちにしつ／まりて民家少も障りなし人々これを怪み／

【絵③】

競ひ走り立よりてかの法師の形をみれば、是魏々たる相好円満の地藏菩薩の將に、大なる蛸に駕し／てましますなり、見る人奇異のおもひをなし、合／掌をさ、けて至心に敬礼し奉り、立地に奇瑞を／蒙るもの多かりき、時の人言伝へに昔此御城の処に／大伽藍ありし時、靈験殊勝の地藏尊ましませしか／とも、乱世不平の逆卒侵れ、つひに其勝跡を失といへり、／況や久しく海底に沈在し給ふ、誰かこれを知るものあらむ、／然るに今此郷に城郭を築き、繁榮の地となれる嘉／運に應して、尊像の出現し玉ふこと悦び、猶余りあり／とて諸人歩を運ひ市をなせり、具に城主その奇／異を感じ給ひ、深く信仰を發し、諸士に命して御城／内清潔の地を撲み、新に一字を建立して地藏尊を安／置せらる、然りといへとも、世上いまた静ならされは、城の／要害軍議の謀に、心を摧き給ふこと旦夕なり、其比遽に／一戦蜂起するの日、城主思へらく、若此戦中に於て逆軍／不意にあたらん時、靈像恐らくは兵火の為に危ふ／からん、暫く尊像を鎮護せん為に、堀の海底に沈め／兵火を通るへし、と遂に尊像を城堀の中へ埋隠せ／り、爾しより、世いまた静ならず、



【絵③】



【絵④-1】



【絵④-2】

ふたたび尊像をあけて、本所へ移しまゐらす者もなく、世うつり人かはりて、むなしく淤泥の底に埋れ給ふこと、亦星霜久し、／其後天正年中に、松浦肥前守殿此城主たる／時、紀州根来雜質の逆党にはかに軍を起して、当／国に馳入城に押寄り、城主元来軍謀を究め、／要害たたならす四圍を禁固し敵軍襲逼りて、／たかひに矢音叫ひ、相闘ふのあいた、城の内外／すてにあやうく見へし時、いつくともなく、／

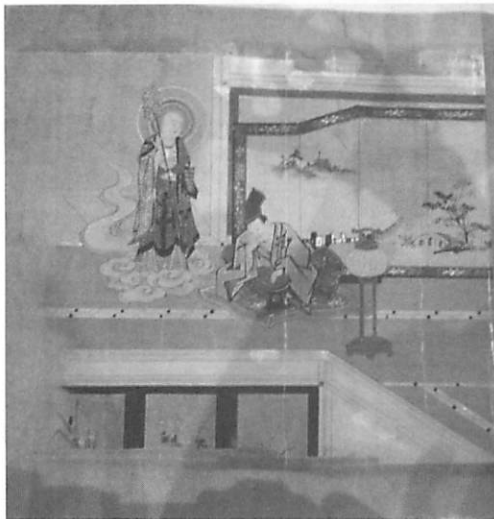
【絵④】

ひとりの法師忽然と顕れ、出数万の敵の真先へ／飛か、り、一錫に数拾の敵徒を防ぎ、神変威力の／猛き勢ひ、天電吼し地震動せり、敵軍これに／おとろき、鋒を挫き力を失ふ色みへしかとも、おのか／多勢に誇り、恣に悪言し、かの一頭のたこ法師を／責取れよ、遁すなくと伺りつ、逆党みな火はな／をちらし、法師を討取んとする時に、こゝに海辺俄に／鳴動し、数千の蛸集り会て、口より黒き物の毒気を／吹かけしか、軍中忽闇夜の如く、敵の軍卒は毒氣／にむせひてや、或は落馬し、或は倒る、者、衢に盈ち／たり、敵軍遂に敗北し、一戦了りて全城恙なく治／りぬ、これにて城主諸士を鳩め戦功を録せん／と、且かのたこ法師をしも尋ねらるゝに、其行衛知る／ものなし、城主怪みて曰く、凡今度の軍中に功を／得るは、偏にかの

法師の威靈神力なり、宜く厚く／其恩を謝すべし、と、さて至誠の感ずる所空しからず、／遂に其の夜の夢に、／

【絵⑤】

法師来り告てのたまはく、君不知や、我は是むかし、／海中より出現せしものなり、故に此所を守護する事、／未だ嘗てやますは、又城主の危きを救ひ大敵を防ぐ、然る／に、殺害を厭ふかゆゑに、わか眷属の大鬼王を申し、只君に／戦功を取らしむ



【絵⑤】

るのみ、と、／城主夢覚て、未明に諸士を招集／め、夢の由を語られけるに、聞者未曾有の思ひをなし、深く／信敬し奉る、其後夜な／

【絵⑥】

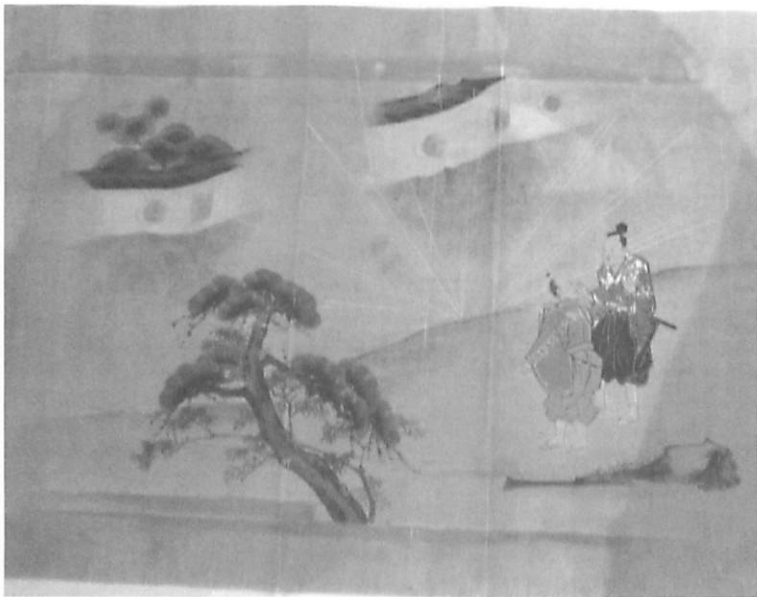
堀の中より光を放つ事、しきり也、みる人奇想を／なす、其風聞、終に城主の聴に達しければ、則命して、／人夫を集堀の内をさらへしむるに、／

【絵⑦】

泥中に怪き物見当りける、各力を尽し取あけみけ／れば、淤泥にまみれて其牀を認めかたし、よて水を沃／き、さゝらをもて洗ぬれば、円頂僧形の長三尺はかり／の偏膝をまけ、一脚をのへ下し、左手に宝珠を撃け、右手／に六環の錫杖執給ふこの地藏菩薩なりし、城主歡喜／の涙を流し、渴仰瞻礼し給ひ、猶諸士と相議して、寔に是／嘉運瑞祥を獲たり、万民これより泰平の仁洋をうけん／と、則城中に別殿を造り靈像を安置し、一七日の間／城門の往来をゆるうし、諸人をして参詣せしめらる、

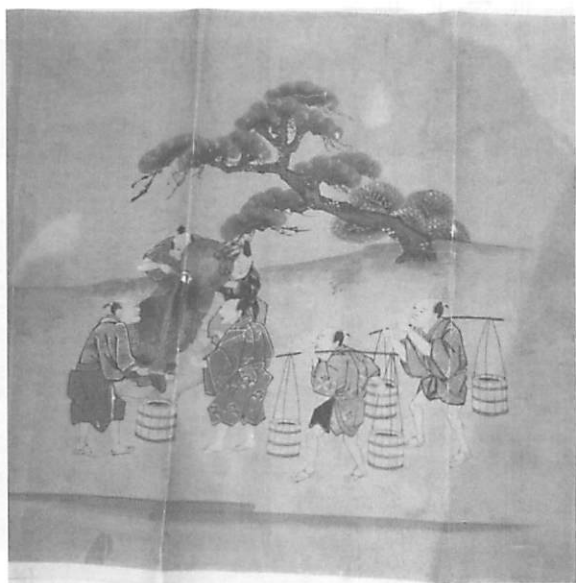
【絵⑧】

一たび拝する輩は、また自ら喜の眉を開き、或は願有／者は、在地に利生を被ること其数を知らずとなむ、／文禄年中に、城



【絵⑥】

後、小出播磨守殿城主たりし時、／白法師と変現して、往來の男女頼りに恐れ／を作すの風説あり、／其事城主の聴に達し、諸士を／集て左右評議に及へとも、誰有てか菩薩の幻化／を判断せるものなし、時に城主ことさらに曰く、蓋／宿生の機感時応し、諸人往來に拝瞻し、やすか／らしめん為の大悲の方



【絵⑦】

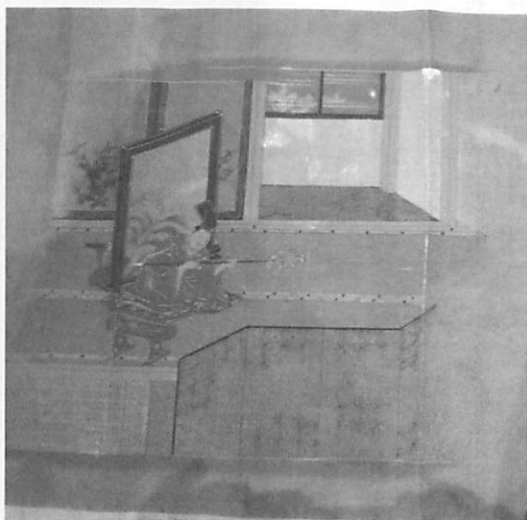
主国替の時、此地藏尊を其国／へ移さんとの催しありけるが、或夜枕辺に來／現し給ひて／

【絵⑨】

告て曰く、我を国許へ移んする志なれとも、我は此／地に因縁あれは、当所を離れ行こゝろなし、若猶／強て伴んとせは、此錫杖を与ふるあいた、これを／我とおもひて護持すへし、と城主夢覺て後、見／まはさる、枕辺に、六環の錫杖ありし、こは辱し、／と感涙肝に銘し、かの錫杖をとりて珍護し、其家／代々の宝物として今に參府の往來ともに持せらる／との事なり、其



【絵⑧】



【絵⑨】

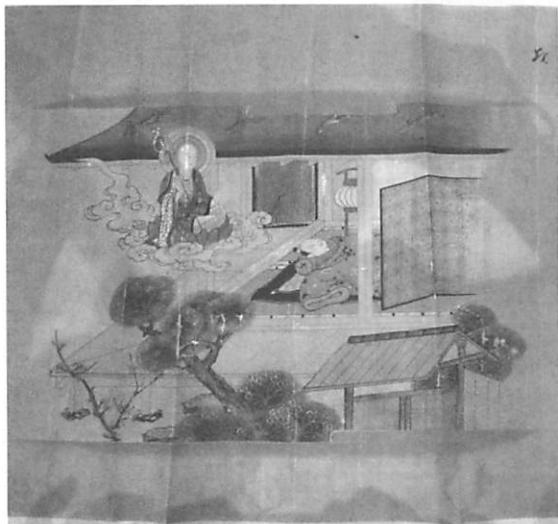
便ならむもの歎、しかし此／尊像を城外に移し奉らんには、と
 其時当寺の往持、／得誉といふ者、元来此尊像を信仰の余り、
 其風説／を聞ま、速に城主へ願出、此寺へ迎へ奉りける、／
 【絵⑩】
 但尊体、千古の星霜を経て朽損し給へは、再興せはや、／と茲
 に上京せんと人夫の用意なとしけるか、また其／夜



【絵⑩】

【絵⑪】

長谷川勘左衛門といふ士の夢に、菩薩來らせ／給ひ告て曰く、天性寺の住持、我像を再興せんとて將ひて、京へ上らんとせり、然れども、我みやこへ／のほることを欲せず、此地へ仏師を呼下せよといひ／伝へよ、とのたまふとおもへは、夢覺たり、長谷川氏、／元より少も此事をしらす、かくまさしき示現を蒙



【絵⑪】

【絵⑫】

／る上は將ふへきにあらし、とて未明を待かね、急き／天性寺へ參詣し、事の体をみるに、下部など多く／入来り、物体あやしかりければ、されはこそとて／直に和尚に面談し、靈夢の趣を具さに語り／ければ、和尚もこゝに驚歎し、即ち御告に任せ



【絵⑫】

いそぎ仏師を呼下しやりて、修飾を加へんと先／尊体を開きみるに、／

【絵⑬】

鉄炮の玉、いくつともなくまろひ出て、さてこそ往昔／の軍場に変現し給ふこと、更に妄伝にはあらざり／し、とておの／舌をふるひ、至誠に敬礼し／あへりける、遠近の諸人、この事を聞伝へ、誰す、／むるともなくして、結縁雲集しぬ、さて仏工功／終りて、後々の諸人の疑闇を決明せん為に、とて／鉄炮



【絵⑬】



【絵⑭】

の痕一ところ修補に及はずして残されたり、／かくて道俗の信敬ます／／さかななれば、感応／日々顕る可、謂片雲たちまら齋て、慧日の光／ふた、ひ輝き、千草枯なるとして法雨の潤を／得る事、これ得眷泰山上人の功勳なり、爾し／より、以降化縁ます／／昌ん也、蓋いればこの／尊像貴賤ともに歩を運ひ、壮老均く瞻礼し、／普く利益を施し給ふの聖意ならむ、知る所／以て日々歩をはこひ、夜々願を賽て利益を蒙／ること、遇遇の諸人まのあたり知る所なり、仰く／へし、信すへし、嗚呼たふとひかな、蜻地蔵／の化主大薩埵南無地蔵大菩薩／

【絵⑭】

天性寺聖地蔵尊縁起浄書了／弘慶 叟 印記／

地蔵尊縁起今茲因裝潢修飾記蓋為／開扉也 護持山十八世／安政四年三月上流 慈普仁達

②「地蔵菩薩利益集」所収、卷三の十一「岸の和田天性寺地蔵菩薩尊靈験の事」

大谷大学図書館蔵本。元禄四（一六九二）年刊。浄慧編。冊子本。全五卷。渡浩一氏は「地蔵菩薩利益集」の世界―貞享・元禄時代の民間地蔵信仰―（『仏教民俗研究』第六号、平成元年九月）において、

「利益集」は、編者浄慧の見聞録は当時の巷間説話によつて構成され、数話の例外を除いて先行典籍からの書承説話を含まないことで注目される。巷間説話は貞享五年刊「地蔵菩薩利生記」（浄慧編、六卷）、元禄五年刊「礪石集」（蓮体編、四卷）、元禄十年刊「延命地蔵菩薩経直談鈔」（必要夢、十二卷）などにも見られるが、全体をほぼそのみで構成するのは「利益集」のみである

と報告しているとおり、「地蔵菩薩利益集」は、経典を典拠とする靈験譚を採録せず、さらには、他の文献に収集されていない、新たな利益譚を収集し、採録したものである。

【本文】

泉州岸和田天性寺の地蔵菩薩は、いかなる人の作といふ事／をしらず、人皇九十五代後醍醐天皇の御宇建武年中に、／（二十

二才）

楠河内判官正成、此国を領す、時に舍弟和田泉守正氏／此城に居住せり、そのころこの尊像海上より蜻にのり／てあがらせ給ふ、それによつて此里人蜻の地蔵と名付奉る、／その後うちつゞき、国／兵乱蜂起して、万民手足／をおくにところなければ、三宝と尊崇する人まれにして／不道のやからおほかりけるにや、此尊像を城の惣堀の／中へしづめ奉りぬ、此事しら

ずもやありけん、たれとり／あげ奉るものもなくて、むなしく
月日ををくりけるに、／その、ち小出大和守居城の節、かの堀
の中より金色の／ひかりさして、城中をてらせり、諸人心目を
おどろかして／いかさまこれはゆへあるべし奇異の事かなとい
ひのじける／程に太守も今はもだしかねて、さらばほりの水かへ
て／(二十二ウ)

見よとて、人夫をかけて換させられるに、此地蔵／菩薩こそ
あらはれ出させ給ひけり、さては此尊のはなち／給へるひかり
にてあめれとて、君臣ともに信をとつて、／すなはちかの堀の
わたりに、小堂をしつらひて、安置し／奉らる、それよりして
は、かの光明もさ、ざりければ、／諸人いよく／信服して、渴仰
の心をかたふけてげり、／其後感応あまたの中に、わきてあら
はにふしぎなるは、／一ころ根来雑賀の者ども一黨して、この
城をせめんとて／おしよせ、稲麻竹草のごとくうちかこみ、鯨波
やまをうごかし、戈鋌日にか、やきて、敵みかたがひに骨を
くだく／ところに何ともなく大の法師一人、忽然とあらはれい
で、鐵／棒をもつてさん／にた、かへり、奇手これをおつと
りこ／(二十三オ)

らさる、敵又はせあつまりてうちよすれば、又この／法師いづ
くともなくあらはれ出て、千變万化、神力自／在に見えければ、
奇手もふしぎの思をなし、今ははや／賈あぐみければ、をの／
一まづ引とらんと評定するに、／中にも又す、み出て申ける
は、このころ度／の合戦、白昼によすればこそ、かゝる法
師にふせがれぬ、いざや暗夜／にしのびよりて、一夜討して見
んといひければ、此議もつ／ともなりと同じて、或夜しのび／
ゝに城ちかくおしよ／せて、鯨をどつとつくりけるに、城中
周章、弓よやりよと／ひしめきて上を下へとかへしけるうち
に、それとはなく／(二十三ウ)

城中におなしく鯨波をあはするこゑ、いかづちなどのごとく
にして、又槽／より手／に百子の松明をなげ出／し、
弓箭兵杖を帯せし武者、いく重ともなく立かさな／りて、雨の
ふるごどくに矢をいかけければ、奇手案に相／違して、かゝる
大勢のこもりて、しかもかくきびしく／ふせがんにおゐては、
身方いかでか勝利をうべきといふ／程こそありけれ、我さきに
と引しりぞきて、とかく此城賈／おん事はかなふまじとて、を
の／本所へかへりける、かくて／城内にはおもひもよらぬ軍
にうちかちぬる事、これた／事にあらず、いかさまにも地蔵
はさつの冥加あらせ給ふ／にこそといふやから多かりければ、

城主もさにこそあらん／ずらめ、とかくまづかの堂へまいりて、
礼謝奉んとて、／(二十四オ)

軍卒とともにいそぎかの地藏堂にまうで、尊容／を拝し見給ふに、こはいかに多の矢を射たてられさせ給ふ／のみならず、鎧炮のあと又かすもなし、さてはうたがひもなく、／この尊の慈悲加祐し給ひぬるにこそとて、をの／感／涙をながされけり、城主はことに此御ありさまを見て、心／肝にそみてありがたくおもはれければ、供養恭敬のま／ことを抽て、それより当城の鎮主のごとくにあがめたてま／つられけるとなん、かくて根来の雑賀も、羽柴秀吉公のため／にうちおさめられて、日ごろの強毅もやみてければ、当国／の人民いよく／安堵のおもひをなし、ひとへに大土の餘光也／とて感喜の心をかたふけけり、その、ち松平周防守在城／の時、いさ、かゆへありて、この地藏堂を近村池の尻といふとこ／(二十四ウ)

ろにうつさる、かくて星霜としふりて靈像もや、くち／そんなさせ給ひ、堂宇も破壊になん／とす、こ、に天性／寺の開山得替上人は、質直正信の人なりけるが、かゝる靈／像のうづもれさせ給ふをかなしみ、なにとぞ寺中へもり／入まいらせて、せめて朝の閑伽、夕の灯など、くやうし／奉りたきむね、城主へ訴申されけるに、願望事ゆへなく／あひかなひてければ、

すなはち寺中へ請じ奉り、心をつく／してつかへられける、かくて尊像再興のこゝろざしふかく／おはしけるが、事やうやくと、のほりければ、明日こそ／京都仏師のかたへおくり奉んとて、人夫まで用意せら／れけるに、その夜長谷川勘左衛門といへる侍のゆめに、／地藏はさつのきたらせ給ひて、天性寺の住持、我をさい／(二十五オ)

かうせんとて、明日みやこへのほさんとす、然れども我は京／へは上るまじきなり、いそぎ此地へ仏師をよびくだす／べしといひつたへよとの給ふとおもへば、ゆめさめぬ、もと／より長谷川氏此事を露しらざりけるが、かくまさしき／示現をかうふるうへは、うたがふべきにあらずとて、いまだ／あかつきなりけるに、いそぎ天性寺へ行むかふ、すでに寺門／に入て、事のやうを見るに、下部などいりきたりて、事／のていあやしかりければ、さればこそとおもひて、やがて／上人に対顔し、昨夜の靈夢をかたりければ、上人おど／ろき、さらば聖意にまかせたてまつらんとて、すなはち／上京の儀をおもひとまりて、いそぎ仏師を呼招せられ／けり、仏師やがてはせさんじて、修飾をくはへんとし／(二十五ウ)

て、尊体をひらき見るに、鎧炮の玉いくつともなくまろ／び出けり、さてこそむかしの軍場に、変現し給へる事、／さらに妄伝

にあらず、証拠せうここれなりとて、／をの／舌したをふるひ、かさねて信敬しんきやうの丹心たんしんをこらしけり、／遠近えんきんの里人さとこの事をき、つたへて、たれす、むかともなく、／分檀ぶんだんけちえんしける程に、嚴飾げんじやく殊妙しゆめうに功こうおほりて、諸しよ／人觀みんかんをあらためたり、さるにても、後のちの世よまで信をつた／ふるためなればとて、鑊炮てつぱうのあとひとところ、修補しゆほせずし／てのこされたり、かくて道俗だうそくの信、ます／／さかんなれば、／感応かんおうのあとひと／にあらはる、いつつべし片雲へんぐんたちまち／はれて、慧日みぢのひかりふた、びか、やき、千草せんそうかれなん／として、法雨ほううのうるほひたちまちそ、ぐと、これしか／
(二十六オ)

しながら得替とくよ上人じゆうじんの功こう應おうにして、地藏菩薩みやくしよの冥助みやうじよ／なるか(二十六ウ)

③「泉州志」所収「天性寺地藏 在岸和田」

元禄十三(一七〇〇)年刊。石橋直之編。全六卷。西峰散人(松下見林)序文、石橋自序文、契冲跋文あり。西峰散人序文に、「和泉国之人石橋直之自壮歳欲察本国之地理奔走処処經歷勝地問神社仏閣之権輿探僧俗之伝記自国史百氏逮歌人之所吟詠無不涉獵凡得泉州事金屑玉碎無不拾遂積纂述泉州志六卷」とあり、「泉州志」は石橋直之が和泉国中の神社仏閣を歴訪し、その

見聞をもとにまとめたことが述べられている。

【本文】

天性寺地藏 在岸和田

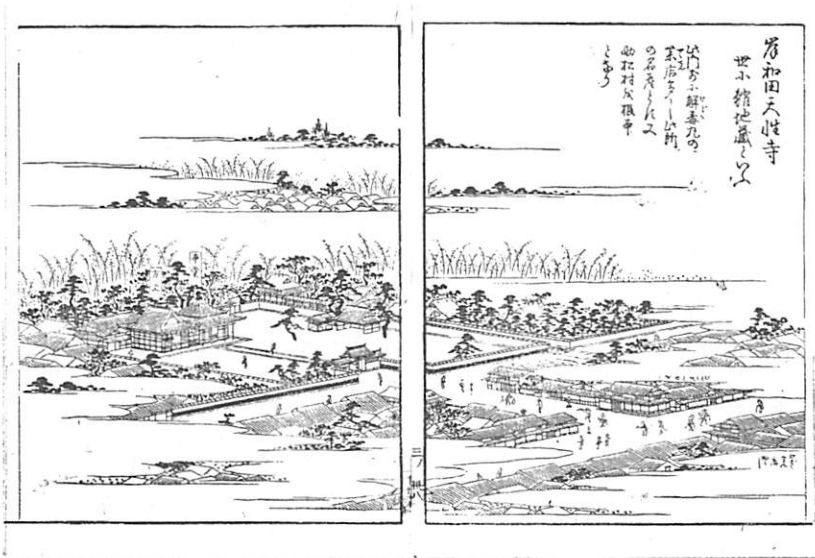
縁起云、当寺地藏菩薩者、建武年中、御蛸背現于海浜焉。時惟乱世人不敢信敬。棄之城外溝洫。天正年中、紀州根来雜賀逆徒、侵近境、来既欲屠岸和田城。時城中有一大法師。鋭術殆妙手、逆徒為之四敗走焉。法師忽焉不見、人皆為奇也。軍散後城主時見蛸之浮溝水、乃怪之、以許多人手模索溝洫。不得、偶泥中得地藏木像、於茲始知先所現大法師者惟地藏变身矣。故俗称之蛸地藏。

④「和泉名所図会」所収「蛸地藏」

寛政八(一七九八)年に刊行された、秋里籬島・編「和泉名所図会」は、「泉州志」と同様の「蛸地藏」伝承についての内容が記されている。この「和泉名所図会」には天性寺境内の図とともに、地藏尊が蛸に乗り、海から出現した様子が描かれている。

【本文】

蛸地藏 岸和田城下、天性寺にあり。寺記に曰、当寺の地藏尊は建武年中蛸の背に御玉ひて海浜に出現し玉ふ。其時節逆乱な



和泉名所図会 1



和泉名所図会 2

れば、人敢て信敬せず。これを城外の堀の中へ棄にけり。天正年中、松浦氏、此城に籠られし時、紀州根来雜賀の逆徒、近隣を侵し、既に岸和田の城を陥さんとす。かゝる時に、城中にひとり大法師あり。劍術妙手を震ひ、蝶鳥の如く戦ひければ、逆賊、大い恐れ、四度路になつてぞ敗走す。大法師、敵を追ちらし、忽然として見へず。人みな、奇也とす。軍散じて後、城主時々、鮎の堀に浮むを見る。これ奇怪也とて、多く人数を以て堀水を探らするに、木像の地蔵尊を得たり。於是、前に現じたる大法師は此地蔵の変身ならんと、初て信敬恭礼ある。なおも、諸人に拝胆させ、仏智の結縁あらしめんとて、当寺の住侶泰山和尚に授与し玉ふ。因茲ここに安置し、世俗これを鮎地蔵と称す。

⑤「泉州史料」所収「縁起」

【泉州史料】は、大阪府泉州地域に関する資料を紹介することを目的として寺田兵治郎が大正三（一九一四）年から六（一九一七）年にかけて、岸和田実業新聞社より刊行したものである。【泉州史料】所収「縁起」は、①の縁起絵巻を簡略化したもので、①に基づいて作成された「略縁起」であつた可能性が高い。

【本文】

縁起

鮎地蔵

抑当寺地蔵菩薩の由来を尋奉るに往古より此郷に久しく住したまふ尊像なるを以人伝て岸和田の地主神／なりと云ならはせり蓋其はじめを尋れば往昔此岸に地蔵菩薩安座の靈場あり宝塔仏閣煥然として列れること工をつくして今時ならぶる寺院なし今の城の内則其遺跡なり或時朝敵此伽藍の境内に乱入て陣屋を／構態に僧徒を捕て軍事に使役し金銅の仏具を擗て兵器となし剩地蔵尊を授て斧を以打侵はす軍賊怪おそれ尊像を海中に投捨のごとくにして少しも損給はず軍賊怪おそれ尊像を海中に投捨ければ則海底に沈た／まふしかしより春秋久くふりて誰か知ものなしその後和泉守殿在城の間或時風頻に起浪溢て／城の内に入らんとすれば城中城下の諸人甚だ驚き去その時法師の形たるもの漂々として波に浮び城の際／に頭風波たちまちに静て民家少しもさわりなし人々是をあやしめ競ひ走りて彼法師の形をみれば巍々堂々／たる相好の地蔵菩薩特に大なる鮎に駕してまします見る人奇異の思をおこし合掌を撃て至心に礼し奉り／立地に奇瑞をかうむる事を覚ふ時の人いわく伝へ聞むかしこの城のところに大伽藍ありし時靈験殊勝の／地蔵尊在ませしか

ども乱世不平の逆に侵遂にその勝跡をうしなふと云へり況や既に久しく海底に沈在し給ふ誰かしるものあらんや然に今此郷に城廓を築繁榮の地となる嘉運に応じて尊像化現し給ふことよろこび猶あまりありとて歩をはこび市をなせり茲におゐて城主其奇異を感じふかく信仰を發諸士に命じて城の内清潔の地を押しめ新に一字を建立して地藏尊を安置せらる然と云へども世にまた静ならざれば城の要害軍の謀にころを推く旦夕なり其頃俄に一戦蜂起するの日城主おもひらくもしこの戰場に／＼おゐて逆運不意にあたらむ時靈像恐くは兵火のために危からん暫尊像を鎮護せんがために堀の水底に沈／＼兵火を遁べしと遂に尊像を堀の中へ移かくしたり爾より世にまた静ならず再尊像を揚て本所に移者なく／＼世つくり人かわりてむなく淤泥の底にうづもれ給ふこと亦年久し其後天正年中に松浦肥前守殿此城主／＼たる時紀州根来雜賀の逆党 俄に軍を起し当国に馳入此城に押寄たり城主もとより軍の謀を究め要害／＼四囲を禁固すといへども敵の多勢に逼り互に矢首叫び相闘ふの間城の内外既に危く見へし時いつくともなく独の法師忽然と拔じ出で敵の真前に馳懸り一箭に數十の敵徒を禦神変威力の猛き糞ひて天を電吼し地を震動すれば敵軍これに驚力をうしなふ色見へしかどもおのが多勢に募態に悪口を吐彼一頭の蛸／＼法師を賈よ

逃すなと誓ければ逆党各々烽火をならし直に蛸法師を討とらんとするとき海辺俄に鳴動して数千の蛸群 集口より黒き毒気を吹掛れば軍中たちまち闇夜のごとく敵の軍兵は毒気にむせび或／＼は落馬し或はたおるゝもの街に分散す終に敵軍敗北し一戦畢て大城恙なくおさまりぬ是によりて城主／＼他日に諸士を集て戦功を祿せんがために彼蛸法師を尋給ふに曾行がたを知ものなし城主怪て謂く今此／＼軍に戦功を得たることは偏にかの法師の威力なり天恩如何謝せんやと誠をつくしてのたまへければ其夜／＼城主の夢に彼法師來りて告ていわく汝知らずや我はこれむかし海中より此岸に出現せしものなりこのゆ／＼に此所を守護することやむ事なし今又城主の危を救彼大敵を禦と云へども殺害を厭がゆへに我が眷／＼風の大鬼王を使してたゞ君に戦功を施のみと城主ゆめさめて後未明に諸士を招き夢の件をかたりたまへば聞者未曾有の思をなし深信敬 奉 又後日夜なく堀の中より光いかめしく放て見る人怪をなすその／＼風聞終に城主へたつす城主 則命じて人夫をあつめ堀の中をさらへしむれば泥中にしてあやしきものを／＼見あたり各力をつくして取揚れども淤泥に雜て其体 審ならず人々水をそゝぎさゝらを取て洗ければ／＼円頂僧形の長三尺計の片膝を曲て一脚を伸下し左の掌に宝珠を擊右の手に六環の鉄錫を採給ふ地／＼蔵菩薩なり

城主欲喜の涙を流し諸士と相共に至て瞻礼し寡に嘉運の瑞相を得たり万民はより泰平ならん／と則ち城中に別殿を造尊像を安置し奉り一七日の間城門の往来を許諸人を参詣せしめたまふに一たび拜する輩はおのづからよるこびの涙を沾し或は願あるものは立地に利益をかふむること其教を知ず而のち／文禄年中小出播磨守殿此城主たる時毎夜白法師と天化して出たまへば往来の男女みだりに恐をなすの風／説あり終に城主の間に達し諸士をあつめて評議せしむれども誰か菩薩の妖化を判談するものなし時に城／主謂く蓋衆生機感の応拙ゆへ諸人の往来に拜見し易からしめんための大悲方便ならん歎しかじ尊像／を城外に移奉らんにはとその時当寺住僧の泰山元來尊像信仰の余り風説を聞て速に城主へ願ひ此寺へ迎奉る但し尊像千古をへて朽損じ給へば再興し奉るべき靈験不思議具には別記にあり爾よりこのか／た化縁ます／盛也蓋以は是の尊像は貴賤共に歩をはこび老若多く瞻礼さしめあまねく利益を施／たまふ聖意ならん知所以は日々に歩をはこび夜な／願かけて其利益あることは遠近諸人のなべて知と／ころなりと云ふ

⑥ 「蛸地蔵尊略縁起」

岸和田市立図書館所蔵。絵入り冊子本。出版年次などの記載

はない。裏表紙に「泉州岸和田蛸地蔵天性寺」とあるのみ。表紙裏に「御詠歌／有難や蛸の地蔵に手を引かれ／弘誓の船にのるぞ嬉しき」。内題は、「蛸地蔵尊御縁起」。

【本文】

蛸地蔵尊御縁起

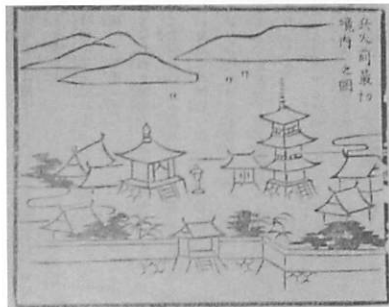
当山は護持山朝光院天性寺と号し浄土宗鎮西派／に属する寺院なり。蛸地蔵寺と称し御堂に地蔵／堂弥陀堂に分れ中に於て地蔵堂は全国第一の称／ある高層なる大伽藍。如意宝珠碧空に高く聳え／背後には蛸に因縁深き茅海を控る風光絶佳参拜／の人々大慈大悲尊の御袖にすがるに好適地と慈／雲の法燈永く照れどくすの御縁起を尋ぬるに地蔵菩薩は誰人／の作と云ふ事を知らず往古より此郷に久しくあ／らせられる尊像なるを以て人伝へて岸和田の地／主神なりと言ひならせ居れりその当時の地蔵／【絵①】（一頁）

堂なるものは御城内にありて宝塔仏閣煥乎壯麗／善工を尽し更に當時ならぶる寺院なしと。／或時朝敵此伽藍に乱入して陣屋を構へ忤に僧徒／を捕へて軍事に使役し金銅の仏具等を摧きて兵／器となし剩え地蔵尊を壊んと勿体なくも斧を振／つて打侵せしが不思議なる哉尊像は元木躰なり／しが金剛牢固鑽石の如

く少も損傷し玉はず於
 是／軍賊怪み怖れ尊像
 を海中に投げ入れ海底深
 く沈／み玉ふて爾來幾く
 の春秋を経るも誰れ有て
 知る／者なかりき。／爰
 に人皇九十五代後醍醐天
 皇の御宇建武の年楠／
 判官正成公此国を領せ
 らる、の時期の和田和泉
 ／守在城せられしが或
 時風頻りに起り波浪高く
 溢／【絵②】（二頁）
 れ潮の方に城内に入らん
 とす城中城外の諸人非
 ／常に驚き右往左往と逃
 げ惑ふ折ふし不思議なる
 ／哉寄せ来る浪の上に法
 師の形をなしたるもの漂
 ／々として波に浮び城際

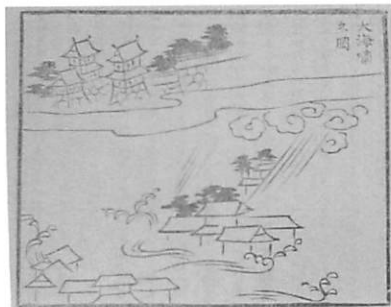


絵②



絵①

に来る時風波忽ち静りて／民家少も損傷なし人々は是を怪み立ち
 寄りて彼の／法師の形を見れば是魏々たる相好円満なる地藏
 大菩薩の特に大なる蟒に駕して在す御姿なり見／る人々奇異の
 思ひをなし合掌を捧げて至心に敬／礼し奉り立地に奇瑞を蒙む
 るもの多かりき時の／人言傳へに昔此の城に大伽藍ありし時靈
 驗殊勝／の地藏尊在しかども乱世不平の逆賊に侵れ遂に／其
 勝跡を失と言へり況や久しく海底に沈み玉ふ／て誰一人知る者
 なかりき然るに今此郷に城郭を／【絵③】（二二頁）
 築き繁榮の地となれり嘉運に應じて尊像の出現／し玉ふ事悦び
 猶余りありとて諸人歩を運び市を／なせり茲に於て城主其奇異
 を感じ玉ひ深く信仰／を
 発し諸士に命じて城の内
 清浄の地を撰ばしめ／新
 に一字を建立して地藏尊
 を安置せらる然るに／世
 上未だ静かならず城の
 要害軍の謀に心を推く
 ／こと旦夕なり其頃俄に
 一戦蜂起するの日城主
 思／へらく若此の戦場に



絵③

於て逆運に遭ふの時、是は靈像／恐らくは兵火の為に危からん暫く
 尊像を鎮護せ／ん為めに堀の水底に沈め奉り、兵火を通るべしと
 遂に尊像を堀中へ埋隠し玉へり而してより世永／く静かなら
 ず再び尊像を揚げて本所に移し奉る／ものなく世移り人かわり
 てむなしく淤泥の底に／【絵④】(四頁)

埋れ玉ふこと亦年之し其後天正年中に松浦肥前／守殿当城主
 たるの時紀州根来雜賀の逆党俄に軍／を起して当国に馳入此城
 に寄押せたり城主を始／め一奇当千の諸勇士軍の謀を究め要害
 堅固四圍／を禁固す。されど敵軍多勢を以て逼り互ひに矢／音
 呼び相闘ふされど多勢に無勢城の内外既に危／く見へし時奇な
 るかな何処よりもなく

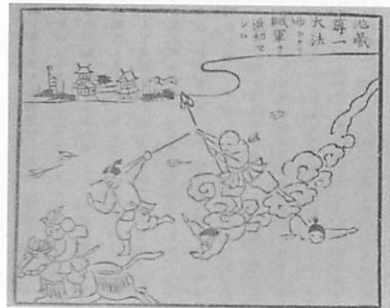
一人の／法師忽然と峭に
 乗りて現れ幾萬の敵の真
 先に馳／入り一錫に數十
 の敵徒を防ぎ神変威力の
 猛き勢／ひ天電吼し地震
 動するの有様為めに敵軍
 大いに／驚き力を失ふ色
 見へしが己が多勢に誇り
 恣に悪／言し彼の頭



絵④

の峭法師を責められよ遁す
 な／くと／罵りつ、逆党
 各々烽火をちらし峭法師
 一人を討／【絵⑤】(五
 頁)

取らんとする時海辺俄に
 鳴動し同時に数千の峭
 群集口より黒き毒気を
 吹掛ければ軍中たちまち
 闇夜の如く敵の軍卒毒



絵⑤

氣にむせび或は落馬し或／は倒る、もの街に満ちたり敵軍終に
 敗北し一戦／了りて全城善なく治まりぬ是に依りて城主諸士
 を集め戦功を録せんと彼峭法師をも尋ねらる、／も其の行衛知
 るものなし城主怪て謂く今此軍に／戦功を得たるは偏へに彼の
 峭法師の威靈神力なり／宜しく厚く其の恩を謝すべしと至誠の
 感ずる／處空しからず遂に城主其夜の夢に峭法師来り告／げて
 の玉はく汝知らずや我は是れ昔し海中より／此岸に出現し常に
 此の地を守護せるもの今城主／の危を救ひ彼大敵を禦くと雖も
 殺害を厭ふが故／【絵⑥】(六頁)

に我が眷属を遣はしてたゞ君に戦功を施すのみ／と城主夢覚め

て後未明より諸士を招き
夢の一件／を語り玉へば
聞く者不思議の思ひをな
し深く感／謝し奉る其の
後夜なく堀の中より光
を放ち見／る人怪をな
す其の風聞終に城主の耳
に達す城主／則命じて
人夫をあつめ堀の中をさ
らへしむるに／泥に雑れ



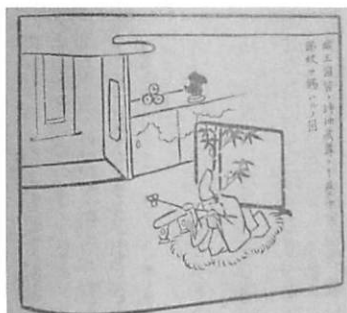
絵⑥

て其の真鉢を認め難し依つて人々水を／そぎ。さ、らを取り
て洗ければ円頂僧形の長三尺斗の片膝を曲て一脚を伸べ下し左
の掌に／宝珠を撃け右の手には六環の鉄錫を採り玉ふ延／命地
蔵菩薩なりし城主欲喜の涙を流し渴仰瞻礼／し玉ひ猶諸士と相
議して寔に是れ嘉運瑞祥を獲／【絵⑦】(七頁)

たり万民之れより泰平の仁洋をうけんと即城／中に別殿を造
り尊像を安置し奉り一七日の間／城門の往來を許し老若の善男
善女を参拜せしめ／玉ふに一度び拝する輩はお自ら喜びの涙を
流し／或は願あるものは立地に利益を蒙むる事其数を／知らず。
／文禄年中に城主国替の時此の地蔵尊を其の国に／移し奉らん

と心鏡に考へけるが或夜
と心鏡に考へけるが或夜
枕辺に地藏／尊の來現
ましまして告げての玉く
我れ国許へ移／さんとす
る芳志辱なけれど我は
此地に因縁深き／ものな
れば当所を離れ行く心更
になし若猶強て／伴はん
とせば此錫杖を与ふる
故是を我と思ひ／て護持
すべしと城主夢覺て後見
れば枕許に六環／【絵
⑧】(八頁)

の錫杖ありこは辱しと
感涙肝に銘じ爾後其家代
／々の宝物として珍護せ
らると其の後小出播磨守
／城主たりしとき白法師
の出で往來の男女頻りに
／恐れを作すとの風説あ



絵⑧



絵⑦

り其事城主の聴に達し諸／士を集めて種々評議せしが誰一人として是れ地／藏菩薩の夭化なりと判断するものなし時に城主／殊更に玉はく右の白法師こそ地藏菩薩の夭化にして衆生／濟度の機熟し諸人往来に拜礼し易か／らしめん爲の大悲の方便ならんか。しかし此尊／像を城外に移し奉らんにはと其時当寺の往僧／得替上人元来此尊像を信仰の余り風説を聞きて／速に城主へ願ひ此寺へ迎奉る但し御尊躰千古／を経て打損じ玉へば京都仏師の手に依りて修復【絵⑨】(九頁)

たてまつ奉らんと、茲に上京の準備人夫の用意など爲／しけるに又其夜長谷川勘左衛門と云ふ士の夢に／地藏菩薩来現し玉ひ告げての曰く天性寺の住持／我像修復の爲我を伴ひて京へ上らんとせり然れども我都へ上ることを欲せず此地へ仏師を呼下せよと言ひ伝へよとの玉ふと思へば夢覺たり長谷川氏元より少も此事を知らず斯く正しく示現を蒙むる上は一時も早く



絵⑨

住持に告げ知らせんと／未明を待かねて急ぎ天性寺に参詣し和尚に面談し／靈夢の趣を具に語りければ和尚も非常に驚嘆し即ち御告に任せ急ぎ仏師を呼下しやがて修飾／を加へんと先づ尊躰を開き見しに鉄砲の玉幾つ／ともなくまろび出でさてこそ往昔軍場に変現し【絵⑩】(一〇頁)

玉ふこと更に妄伝にはあらざりしとて各々至誠に敬礼し合へりけり遠近の諸人此事を聞き伝へ結／縁雲集したり。さて佛師功終りて後々の諸人の疑問を説明せん爲にとて砲彈の痕一ヶ所修復に及／ばずして残されたり。爾してより此方道俗の信敬益々盛なれば感應靈験日々／に顕る蓋し是れ此の尊像貴賤共に歩を運び老若均く瞻礼せば普く利益を施し玉ふの聖意ならんか。それが所以は日々歩／を運び夜々願をかけて利益を蒙むること枚挙に遑あらず今極最近の顯著なる御靈験の一を示さん／に岸和田町大工町に船大工を業とせる善



絵⑩

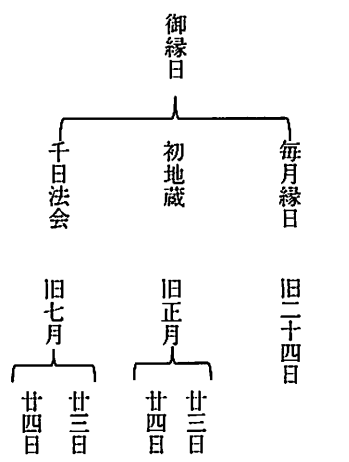
野某と云ふ人あり。元来当蛸地蔵尊の信者なりしが廿七才の或日父と共に隣村漁夫の家に仕事中突然右眼痛みを覚え其の儘帰宅せしも痛み益々烈しく医／師よ薬よと種々手を尽すと雖も少しも其効なく医師よりは失明の外なしと迄宣言せられ、是こに／平素信仰せる蛸地蔵尊の御袖にすがりぬ夜となく昼となる参拝祈願すること五ヶ月、不思議なる／かな三日間計り非常なる下痢を催し。とても生命覚束なしと覚悟をきめ居りしに、下痢止まると／共に眼病の痛みも去り其より洗ふが如く快方に向ひ約一ヶ月にして元の如く全治したり。某の喜／び懽ふるに者なく爾来地蔵尊縁日には必ず未明より参拝。本堂の手伝いをなし地蔵尊への御給仕意／りなし。報恩の志感すべし賞すべし(一一頁)

片雲忽ち晴れて慧日の光再び輝き千草正に枯れなんとして法雨の潤を得る事はれ地蔵菩薩の御慈／悲の顕れなり／今大悲蛸地蔵尊より諸祈願者の得たる御利益の数々を記し世の病に悩める人々の便りにせん／一子供のスパンク病(脱腸)に心を勞する親／一愛児の顔を眺めつ、乳なくして悲める母親 一乳多きか病の為に暫く乳を預けたき婦人／一安産を希ふ諸婦人 一チヤレ毛(クセ毛)にて苦しむ婦人／一眼病失明にて苦しめる人 一盜難の憂ひを除かんとする人／一イボを取り除か

んとする人 一悪疫災難を免れんとする人／一臆病心を取り除かんとする人 一其他一切の諸病にて苦しめる人(一二頁)

(背表紙裏)

南無蛸地蔵大菩薩功德日／正月十六日 八万五千日向 七月十四日 五千〇〇日向／二月八日 十七万〇日向 八月十八日 九万六千日向／三月十五日 三万五千日向 九月十一日 六千七百日向／四月廿五日 九万八千日向 十月九日 八万三千日向／五月廿四日 一万五千日向 十一月十九日 三万五千日向／六月三日 三万六千日向 十二月廿四日 一万五千日向／右之通三年三月か、さず参詣する人は子孫繁昌諸



願成就し／て何事も心に任せずといふ事なし／

〔付記〕

貴重な御蔵書の閲覧・翻刻をお許しくださった、護持山朝光院天性寺住職・土井信演氏に厚く御礼申しあげます。

(つじ) ようじ／本学大学院生)